

# あなたもふるさと学芸員

## 続「神埼塾」の講演から⑥

### 神埼人がつくった水生生物の楽園

屋根のない水族館・佐賀平野

講演者 厳木高校教諭 中原 正登氏

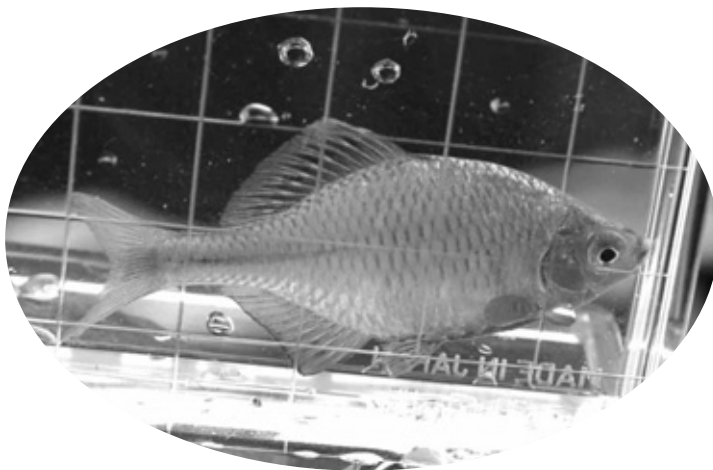


### 佐賀の淡水魚のルーツは？

私はトンボやメダカなど水生生物の研究をライフワークにしていますが、絶滅の恐れがある種が増えています。危惧の度合いには三段階があります。神埼市内では50種以上の淡水魚が確認されており、その中には、アリアケヒメシラウオ、ニッポンバラタナゴといった「危機に瀕している種」やメダカ、エツ、ムツゴロウ、ヤマノカミなど「危険が増大している種」、オヤニラミという「生息条件の変化によつては危惧に移行する可能性のある種」があります。

### 魚に優しい水循環システム

ヤフナ、オイカワ、ウナギはもちろん、ドジョウ、カゼトゲタナゴ、ドンコ、トウヨシノボリ、カマツカなど、知名度の高い魚からほとんど知られていないものまでたくさん淡水魚がいます。



絶滅危惧種のニッポンバラタナゴ

### 神埼市は屋根のない水族館に最適

自然には屋久島や白神山地、知床のような原生的自然と佐賀平野の55%は二次的自然に依存しています。伝統的な農林業の中で行われていた作業が環境保全の役割を果たしてきました。しかし、営農スタイルの変化や農業者の高齢化など近年の農業問題が二次的自然を悪化させています。魚だけでなく、二次的自然で繁栄してきた赤とんぼやメダカは激減し、秋の七草のフジバカマは佐賀県では絶滅、キキョウも絶滅危惧種になっています。

水生生物にとって、格好の棲家は人間の造った昔の田園風景です。水路、クランク、田んぼ、林、神社、里山、人家がモザイク的に配置された地域では、水生生物の棲息に適した水循環システムがありました。ナマズやドジョウなどは田植えのころに田んぼに上がって産卵していました。それを昔は「上がい魚」と呼んでいました。そして小魚が大



水田魚道の施工例

【出典：福井県海浜自然センターHPより】

きくなると、水路に戻る、そんな営みの繰り返しで水生生物は生き生きと次世代を生み出すとともに、地域の人々に貴重なタンパク源を提供してきました。

佐賀平野では人の手で造られた水路網が治水や利水だけでなく、水生生物の生息環境としても重要な役割を果たしています。中でも、淡水魚は全国有数の生息域であり、神埼を含めた佐賀平野・有明海は希少淡水魚の宝庫です。そのルーツは大陸の古黄河にあると考えられます。

### 有明海生物は大陸系

次に有明海の生物について説明します。約2万年前の最後の氷期、海面は現在よりも約100m低く、その当時、現在の有明海は海ではなく、海岸線は、現在の天草の沖にあったと考えられています。ここに広大な干潟があり、ムツゴロウなどはここで生活していました。だんだん暖かくなって水面が上がり、有明海は浅い海となりました。ムツゴロウなどの干潟生物は浅い干潟を求めて大陸沿岸に棲家を移しましたが、一部が有明海に移り棲みました。しかし、それも有明海に広大な干潟が形成されたから可能だったのです。

実は、有明海に広大な干潟が形成されたのはいくつかの偶然があったからです。約9万年前に阿蘇の大爆発の火砕流にともない大量の土砂が堆積し、これが風化し有機質を含んで黒ぼくと呼ばれる土になりました。黒ぼくは、河川の運搬作用で有明海に流れ込んで堆積し、濁泥になりました。有明湾口が島原半島と天草で狭められ、濁泥が外海に流出しにくいこと、日本一

### 影響大きい外来種

水生生物に対する外来種の影響が大きくなっています。影響の仕方には「捕食」「競合」「遺伝子汚染」があります。捕食という面では実証研究の結果、動くものしか食わないオオクチバスよりも、卵までも食べるブルーギルの影響がはるかに大きいようです。競合では、佐賀市がかつて蚊対策のために水路に放流した「カダヤシ」の存在があります。平野部ではカダヤシがメダカと競合し、メダカが急激に減っています。遺伝子汚染としては、ニッポンバラタナゴがあります。ペットとして飼われていた外来種のタイリクバラタナゴと混血し、純系を保つのが難しくなっています。

圃場整備後の田んぼはパイプラインで水が入り、塩ビ管で排水するという人工的な水循環システムになりました。かつての循環システムはほとんどなくなり、水田で産卵する習性をもつ魚は田んぼと往来が出来ず、産卵場所がなくなり、ほとんど絶滅するか、絶滅の危機にさらされています。

日本本来の水生生物をよみがえらせるには、田んぼと水路の間に魚が喜々として出入りできる魚道を造り、水の循環システムを取り戻すことが最も大事だと思います。

こうした状況を考えた場合、私は「水田における生物の多様性」を地域づくりの資源として活用したらどうかと考えています。例えば、兵庫県豊岡市ではコウノトリが棲みつく環境を売りにし「コウノトリも棲む地のコメ」を売り出し、通常の50%増の価格で販

干満差の大きい海が濁泥を沿岸に押し戻すことが、さらに干潟を拡大なものにしました。ムツゴロウ、ワラスボ、エツ、アリアケシラウオ、ハゼクチ、オオシヤミセンガイ、シオマネキ、ウミタケなどが有明海の代表的生物であることはご存知のとおりです。ムツゴロウは朝鮮半島や中国にも棲んでいます。スナメリという、有明海に約3千頭はいるといわれる世界最小のイルカもいます。有明海と河川を往来する回遊魚にヤマノカミ、アリアケシラウオ、筑後川などの感潮域にのみ生息するアリアケヒメシラウオなどがいます。



有明海固有種は大陸の置き土産だった

売し、成果を上げています。田んぼ、浅くて流れが緩やかな川、水路は環境・生命教育の場として最適です。佐賀市内の川で小学生に魚とりの体験をさせたところ、「こんな川にも魚が棲んでいるんだ」「魚がかわいく感じられた」「魚を飼ってみたい」「また魚とりをしたい」などと、魚とりを通じて、川を守るべき対象として理解してきたことが分かりました。

### めいめい、農業の六次産業化

神埼市の場合、吉野ヶ里遺跡周辺の水路を「屋根のない水族館」として地域をアピールしたらどうでしょう。例えば、地域の水路に生息するテナガエビは産卵後、海に戻って稚エビまで成長して、再び川に戻って成長する。そういう生き方をします。手軽に釣れて、食べてもいい。「自然保護」「体験」「生命」「食」を楽しめます。農業の六次産業化と言いましょか。これはひとつの例に過ぎませんが、考えれば「屋根のない水族館」への道はたくさんあると思います。

◎問い合わせ先  
神埼市役所 政策推進室  
☎371-0102